



Title	Vol.6 No.4
Author(s)	核兵器廃絶研究センター(RECNA)
Citation	RECNAニューズレター, 6(4), pp.1-4; 2018
Issue Date	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/37986
Right	© 長崎大学核兵器廃絶研究センター

This document is downloaded at: 2020-10-20T05:20:54Z

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)フィン事務局長 来崎 鈴木 達治郎

2018年1月12日(金)から14日(日)にかけて、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)のベアトリス・フィン事務局長が、RECNAの招待により来崎された。今回の来崎は、ノーベル平和賞受賞直後に、調学長特別補佐の指示により、できるだけ早い時期に長崎にご招待し、被爆者や長崎市民、そして若者との交流を実現することを目指したものであった。ICAN国際運営委員の一人である川崎哲氏(ピースポート共同代表)のご尽力により、早々と実現することができた。フィン事務局長にとっても、被爆地への訪問は初めて、ということもあり、精力的にハードスケジュールをこなしていただいた。

1日目(12日)は、原爆資料館にて、「ICANノーベル平和賞受賞記念展『私たちがつくる平和 ～核兵器禁止条約こそ世界の規範～』」のオープニングセレモニーに出席、その後は長崎大学河野学長はじめとする大学・RECNA教授陣との夕食会で意見交換を行った。

2日目(13日)は、午前中に爆心地において献花、その後原爆資料館の見学を行い、被爆の実相を再認識していただく良い機会になったと思われる。メディアに対しても「とても印象深かった」とのコメントを残された。そして、メインイベントである、RECNA主催、核兵器廃絶長崎連絡協議会、核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会共催の「ノーベル平和賞受賞特別市民セミナー、『核兵器禁止条約をどう活かすか～ナガサキからのメッセージ』」に参加。約300名以上の市民を前に、基調講演、そして川崎哲氏、朝長万左男核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員長(RECNA客員教授)、今西靖治外務省軍縮不拡散・科学部軍備管理軍縮課長とのパネル討論にも参加していただいた。夜は歓迎レセプションにて、地元の市民団体や県・市議会関係者、若者たちと交流を深めていただいた。

3日目(14日)は、ナガサキ・ユース代表団の若者を中心に、地元の大学生・高校生約50名を前に、若者との対話集会「ノーベル平和賞団体『ICAN』のフィン事務局長と語る：核兵器廃絶と若者の役割」に川崎氏とともに参加していただき、印象深いスピーチと率直な意見交換を行っていただいた。最



原爆落下中心地で献花するフィン事務局長と川崎哲ICAN国際運営委員

(2018年1月13日 写真提供：長崎市役所)

後に、ワーキングランチとして、RECNA教授陣と今後の協力活動などについて、意見交換を行った。

フィン事務局長は、その後、広島、東京で、とてもハードなスケジュールを精力的にこなし、18日(木)に離日された。広島では、広島平和文化センター、東京ではピースポート、ならびに核兵器廃絶日本NGO連絡会がホスト機関として、日程調整や会合のセットアップをしていただいた。関係者の皆様のご協力に改めて感謝の意を表したい。

このように、フィン事務局長の来崎(来日)行事は、予想以上の成果と印象を残した。最後に私が最も印象に残ったフィン事務局長の言葉を引用しておきたい。

「ポスは首相ではない。ポスはあなたたち市民です。政府(首相)は市民の声を聴いてそれに応える義務があります。市民が力を合わせて声をあげていきましょう。」

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

ベアトリス・フィンICAN事務局長は、原爆資料館の訪問等を通し、初めての被爆地で、核兵器の非人道性と核兵器廃絶への思いをさらに深めたようであった。フィン事務局長は、1月13日に長崎市原爆資料館で開かれた特別市民セミナー「核兵器禁止条約をどう活かすか〜ナガサキからのメッセージ」において唯一の戦争被爆国である日本こそが、核兵器廃絶に向けて強力にリーダーシップを発揮すべきであると強調した。そして被ばく者の訴えが多くの人々を動かしたことが、最終的には核兵器禁止条約の採択につながったと語り、ICANのノーベル平和賞受賞は、被ばく者の方々と共同受賞というべきであるとその貢献を称えた。現在の民主的な社会においては、被ばく者の方々をはじめとする、市民の核兵器廃絶を願う気持ちと主張こそが、国々を動かし、核兵器廃絶の実現を可能にすると述べた。

しかし、核兵器禁止条約に対して明確に反対の姿勢を取る日本政府に対しては、当然のことながら、フィン事務局長は疑問を投げかけた。特にパネルディスカッションでは、フィン事務局長だけでなく、パネリストの川崎哲ICAN国際委員や朝長万左男RECNA客員教授、さらには傍聴していた一般市民の間からも、日本政府の姿勢に対する批判、疑問の声が相次いだ。日本政府は、日米安保体制の下、北朝鮮の核開発や中国の軍備拡張という「厳しい現実」を踏まえて、アメリカの「核の傘」を否定するような政策は不可能であるという従来からの立場に変更を加える意図が無いことを繰り返し表明してきた。核兵器禁止条約の交渉に際しても、同じ理由で交渉への参加を拒否し、国連での採択では反対票を投じている。

セミナーを通して、核兵器の非人道性と核兵器廃絶を求める国々やICANに代表される国際社会に広がる核兵器廃絶を求める市民の声と、核抑止力に依存する安全保障政策を肯定する日本政府の立場との隔たりの大きさが明らかになると同時に、日本やアメリカのように核抑止に依存する国々を説得する難しさが浮き彫りになった。日本政府を説得し、核兵器禁止条約への参加を促すためには、日本政府の主張の土台となっている核抑止論そのものを根本的に見直す必要があると言わなければならないだろう。セミナー後のRECNA教員との意見交換の際に、フィン事務局長も、キャンペーンという形で核兵器禁止条約への支持を集めるには一定の限界がある旨に言及し、今後は核兵器禁止条約に反対している国々に対し、専門的な見地から理論的な説得を進める重要性をも指摘した。そして、そのような観点から、核兵器廃絶を求める市民の活動と、核軍縮を専門に扱う研究者との間の連携が、核兵



特別市民セミナーで発言するフィン事務局長
(2018年1月13日 原爆資料館ホール 撮影RECNA)

器廃絶を実現するうえでは不可欠であるとの認識を示した。

ICANを中心とする市民社会の貢献や核兵器の非人道性を訴える国々の努力により、核兵器禁止条約は国連で採択されたが、その先行きはまだまだ不透明である。国連関係者の一部からは、条約案の採択で核兵器廃絶に向けての人道アプローチの進展が一段落したとの認識が広がれば、せっかく盛り上がった核兵器廃絶への機運が停滞するのではないかとの懸念すら見受けられる。核兵器禁止条約は、その実施に関し、具体的な議論を先送りにした部分を各所に残したままの「未完成な」条約でもある。また、条約案の採択に賛成票を投じた国々の中でもまだ署名していない国が多数にのぼるだけでなく、批准まで終えた国は現時点ではごく少数に過ぎない。核兵器禁止条約に反対している国々の説得は言うまでもなく、賛成してきた国に対しても署名と批准を促し、条約の早期発効を実現するためには、これからが正念場であり、市民社会の力が試されるとの見解を、フィン事務局長は長崎訪問の締めくくりのように述べた。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

「ベアトリスさんやICANメンバーのように、未来に希望を持ち続けられる存在でありたい。」

先日行われた、ICAN事務局長のベアトリスさんとの対談で、私が最も強く思ったことです。

私は今、“Peace Caravan隊”という学生の任意団体で代表を務めています。昨年の10月に仲間と共に設立したこの団体は、平和教育の出前授業を各地で行う団体で、個性豊かな14名で現在活動をしています。前身となる活動は、ナガサキ・ユース代表团4期生がスタートさせ、活動自体は今年で3年目になり、これまでに34か所で3,540名(2018.02.20現在)に、私たちの講演や授業を届けることができました。私はこれからもこの活動に携わり、将来的に多くの学生が経験を積むことができる場所にしたい、平和や核兵器について考えるきっかけを多くの人に与えたいと考えています。



学生と意見交換するフィン事務局長と川崎哲ICAN国際運営委員
(2018年1月14日 写真提供:長崎市役所)

そもそも私が平和活動に携わるようになったのは、大学3年目の昨年、ナガサキ・ユース代表团5期生の一員となった時からです。決して早くはないスタートでしたが、この分野に私を強く引き込んでくれたのが昨年3月NYで行われた“核兵器禁止条約第1回交渉会議”に参加した経験でした。

あの時に肌で感じた、国や身分という枠組みを超えて“人と人”が核兵器の禁止という同じ志の下で団結し、世界を動かす力となっている現実。目の前で力強くスピーチをするNGOや市民団体の人たちの姿は、とても頼もしかったのはもちろん、その人たちの熱い強い想いを、次なる世代の私たちが引き継がなければという使命感を抱きました。

そんな核兵器禁止条約の成立に大きく貢献したICANの事務局長との対談は、勇気づけられたという以外言い方がありませ



学生と意見交換するフィン事務局長と川崎哲ICAN国際運営委員
(2018年1月14日 長崎大学良順会館 撮影RECNA)

んでした。ベアトリスさんを始めとするICANの中心メンバーは、その多くが若者です。若者の役割や重要性を分かっているつもりで、私自身はPeace Caravan隊の活動を続けることを決めていても、なかなか将来の選択肢として“平和”という道を多くの若者が選ぶことができない現実も感じていました。自分たちの考えを発信しても非難されたり、そもそも平和では食べていけなかったり、このもどかしさを伝えた時、彼女はとても共感してくれました。そして、若者の秘密兵器は、未来への希望、何事もポジティブに捉えるエネルギー、世界と繋がるソーシャルメディアであると仰いました。志を同じくする世界中の仲間たちと繋がって“人”としてできることをやっていきたいと思いました。

私がこれから進もうとしている道は、安定もしていなければ善意だけで続けられるものでもありません。核兵器の禁止も廃絶も、理想だ、と言われることがあります。しかし、私の前には頼もしい背中を見せてくれる大人達がたくさんいます。ベアトリスさんや被爆者のように熱い強い想いで、バトンを繋いでくれている人達があります。被爆者や戦争体験者無き世界が近づくと、私達若者世代に何ができるのかを考え動き続けます。ただどいつまでも若者と呼ばれるわけでもありません。だからこそ“今”という瞬間も、未来への希望を持ち続けられる人でありたいと思います。

(みつおか はなこ、長崎大学4年生)

RECNAの活動

2018年1月1日～2018年3月31日

- 1月13日(土) ■ノーベル平和受賞記念特別市民セミナー
「核兵器禁止条約をどう活かすか?～ナガサキからのメッセージ～」
講師: ペアトリス・フィン(ICAN事務局長)
場所: 長崎原爆資料館ホール
- 1月14日(日) ■若者との対話集会
「ノーベル平和賞団体『ICAN』のフィン事務局長と語る:核兵器廃絶と若者の役割」
場所: 長崎大学医学部良順会館専斎ホール
- 1月17日(水) ■Plutonium Pathways: Collaborative Approaches to Managing Civilian and Military Stockpile参加(ウィーン)
～1月21日(日) (鈴木センター長)
- 1月20日(土) ■平成29年度核廃絶市民講座
第6回「ゴジラ誕生: 私たちの核兵器イメージ」
講師: 広瀬 訓(RECNA副センター長)
場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館
- 2月1日(木) ■戸田平和研究所: 北東アジア問題コロキウム出席
(鈴木センター長)
- 2月8日(木) ■Center for Energy and Security Studies Workshop 'Prospects for Nuclear Energy in Japan Seven Years After Fukushima'(モスクワ)
(鈴木センター長、広瀬副センター長)
- 2月19日(月) ■第2回長崎平和学生会議参加
～2月20日(火) (鈴木センター長、吉田副センター長、広瀬副センター長)
- 2月27日(火) ■Journal for Peace and Nuclear Disarmament 発刊記念シンポジウム「Nuclear Risks in Northeast Asia」(ワシントンD.C.)
(調学長特別補佐、鈴木センター長、吉田副センター長)
- 3月12日(月) ■平成29年度RECNA運営委員会
- 3月15日(木) ■第2回RECNA「長崎被爆・戦後史研究会」
「長崎における<原爆>の継承実践とその意義: 幼児期に被爆した世代と若者の活動を中心に」
講師: 深谷直弘(福島大学つくしまふくしま未来支援センター 特任助教)
場所: 長崎大学核兵器廃絶研究センター
- 3月17日(土) ■国際シンポジウム「アジアの核・ガヴァナンス・平和」
～3月18日(日) 主催: 広島市立大学広島平和研究所、RECNA
場所: 広島国際会議場 (吉田副センター長)
- 3月22日(木) ■早稲田大学 Asian Future Leader Program RECNA訪問
(広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表団)

お知らせ

RECNA叢書第3巻発行

鈴木達治郎、広瀬訓、藤原帰一編集 『核の脅威にどう対処すべきか—北東アジアの非核化と安全保障』がRECNA叢書第3巻として法律文化社から刊行されました。定価は3,200円(税別)です。お近くの書店等でお求めください。



平成30年度核兵器廃絶市民講座 「核兵器のない世界をめざして」

第1回 「北東アジアの非核化と安全保障」

講師: 鈴木達治郎(RECNAセンター長)、

広瀬訓(RECNA副センター長)、中村桂子(RECNA准教授)

日時: 2018年5月26日(土) 13:30～15:30

場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

※受講料は無料、参加申し込み不要。



第6巻4号 2018年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター

〒852-8521 長崎市文教町1-14

Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165

E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp

http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 インテックス

©2018 長崎大学核兵器廃絶研究センター